
午前10時のティーパーティー

正木 慶史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午前10時のティーパーティー

【Nコード】

N2697T

【作者名】

正木 慶史

【あらすじ】

とある高校の生徒会で会計を任せられている佐々少年17歳。青春真っ盛りの彼は、文化祭関係の仕事で夏休みに仕事をしなければならなくなった。うだるような暑さのなかいやいやながら仕事をすする佐々には、ひとつだけ、楽しみがあった。

「はいっ、木材費しめて八萬伍千円なりコロ助ナリー」

俺のトチ狂った発言も、生徒会室の壁に静かに溶け込んでいった。

「すげえな！八万五千円なんて俺の一年分の食費と同じだぞっ！カーツ、私立ってスゲエ！」

「なーんて言っても、誰も答えてくれないよねー。なんか泣けてきた」

俺は諦めて、エクセルが開かれている画面に向き直る。

「はい次、機材費33万8400円。高いのか安いのか分からなくなってきた。旨い棒が3万3840本買えるよ！5円チョコならその2倍！」

空しい。空しいよ、パトラッシュ。俺が何かしら言っても、聞こえてくるのはエアコンの駆動音とカシカシとハードディスクが軋む音だけだ。おじさん発狂しそうダヨ……

外では学生達がワイキヤイ叫び声を挙げている。おそらく野球部だろう。彼らは青春の汗を流しているというのに、こちらはパソコンの目の前で嫌な汗を流している。俺も彼らと同じく青春を楽しむべき高校生であるというのになんたる格差社会。政府は俺を救済するべきだ。

「……へーんだ！こっちはエアコンガンガンに効かして悠々自適だもんね！お前らは炎天下で苦しめっ！」

ちよつと八つ当たりにキレてしまった。神はこういう細かい所を見逃さない。年度末の警察みいだ。一時停止の所で隠れて待ち伏せするの止めて。怖いから。それをするくらいなら広島駅のロータリーで無断駐車してる車をどうにかしてくれ。

閑話休題。

神の怒りか、俺のメシアたるエアコン様が、「ガガッ、ゴゲゴッ、ゴガッ」と音をたてた後、ご臨終なさったのだ。

「ちよ、ちよつと待って！戻ってきて！エアコン様！」

二、三度叩いてみるが、なんら音沙汰が無い。うんともすんともいってくれない。

「終わった……何もかもが、終わってしまったよ……」

しかし、悲しいかな。俺に嘆く暇はない。俺はすぐさま立ち上がり、部屋の片隅に置いてある型落ちの古臭い扇風機を起動させた。

えっ？俺が当たるのかって？嫌だなあ、パソコン様に決まってるじゃないか。この暑さでハードディスクがやられたら、泣くに泣けない。この状況下では人間の価値はパソコンより低いのだ。

しかし、暑い。いや、熱い。熱を帯びたパソコンに風を送って冷却しているため、部屋中に熱気が蔓延している。

このままではパソコンがクラッシュしてしまう。俺はフラフラと立ち上がりながら、窓を開ける。爽やかな風が俺の頬を撫でる。しばし風を受けた後、少しでも風通しを良くしようと生徒会室のドアを開けようと、ドアノブに手を掛けた。

「オハヨ、佐々くん。陣中見舞いに来たよ」
「げなっ!？」

もう運が悪かった。作業に身も心もやられた俺は、ドアノブに引っ張られ、一緒に前のめりに倒れ込んだ。

「だ……大丈夫!？佐々くん!」

慌てて駆け寄る楠木。

「ははっ、俺はもう駄目みてえだ……」
「そんな……弱気になっちゃ駄目だよ」
「いや、自分の事は自分が良く分かる……出来れば、俺の遺骨はエアズロツクに撒いてくれ……」
「助けてください!助けてください!」

頭の中で平井堅の『瞳を閉じて』が流れる。なにこれかなり良いオチ。この話を小説にすればかなり売れそう。死とか純愛とかに惹かれて買っちゃうようなおバカ読者に馬鹿売れだよ・か・ん

「はあ、飽きた」
「ああ、そう」

呆れながら楠木は俺から手を離す。

「すまないが、廊下の窓を開けてくれないか？暑くてたまらん」
「はいはい。これでいい？」

楠木は気を利かせて、ドアストッパーでドアも開けてくれた。言葉の足りない俺の発言の裏まで読み取る気配りのよさ。ええ子やわ、ホンマ。

「ふー。涼しか。生き返る心地ばってん」

今日が風の強い日で良かった。これで無風だったら俺は殺人鬼になつてた所だ。

「しつつかし、大変だね、佐々くん。夏休みにまで仕事なんて」

「いやなに。慣れましたよ。人っ気が無くて寂しいのはどうも慣れないけどねえ」

そうなのよお、奥さん。的な手の動きをさせながら俺は言う。

「そりはさておき、ユーあれは持ってきてくれたかい？」

「うん。はいこれ、いつもの」

そう言いながら、楠木は伊丹の紙袋を俺に手渡す。

「ウホッホーイ！水晶堂の水羊羹じゃ、あーりませんか！宮内庁御用達の名品で、雑誌の『この菓子を食わずして死ねるか！大賞』を受賞した程の旨さを誇る人類の秘宝！こんな逸品を持つてくるとは、甚だブルジョワとは恐ろしきものよ……」

俺は羊羹の箱を恭しく持ちながらその場で小躍りする。俺の故郷に伝わる「歡喜の踊り」である。

「ええい！こんな絶品を今食べずしていつ食べるっ！楠木、ちょっと茶を淹れてくるから机の上をちと片付けておいてくれっ！」

「あっ、うん。任しといて」

「ほほう……口の中に入れた瞬間に蕩けて、俺の体まで蕩けてしま
いそう……甘味も良い塩梅で控えめ、上品な美味さだ……洋菓子の
華々しい美味さも良いが和菓子の奥ゆかしいが如き美味さも素晴ら
しい……スパシーバ、もう俺は死んでもいい……」

「……ホント、佐々くんて美味しそうに食べるね」

俺が至福に浸っていると、楠木がニッコリ微笑みながら言ってきた。

6

「そりゃもう！美味しい物を食べてるんだから美味しそうに食べます
よ！」

「甘い物、好きなんだね」

「ああ。砂糖は人類が作り出した至宝で、甜菜を栽培しはじめた人
は天才だと思うよっ！」

「ふい、美味だった。幸福な口福」

俺は茶を啜ってからそう言う。暑い事この上ないが、やはり和菓子
には煎茶であろう。それも濃くて熱いお茶に限る。

「ありがとうな、楠木。こんな美味しい羊羹を食えて俺は幸せだ」

「いえいえ、この羊羹は貰い物だし、私も佐々くんとお茶が出来て嬉しいよ。だからそんなにかしこまらなくても」

「そう言って貰えると嬉しいな。俺も楠木とお茶するの好きだよ」

微笑み爆発といった感じで微笑み返すと、なぜだか知らないが沈黙が場に満ちた。

なにこれ、俺なんか悪い事でも言った？いやなにも言っていないはずだが。

少し戸惑っていると、楠木は慌てたように口を開く。

「あ、あのさ！他の生徒会役員の人達はどうしてるのかな？」

ありがたい事に楠木は、会話の糸口を作ってくれた。この勢いに乗らずに何に乗ろうか！？

「ああ、他のメンバーは今頃校長に提案書を提出してる筈だ。なんでも文化祭後に後夜祭を開きたいんだと」

「へえ、そうなんだ。もしかして佐々くんが今やってる仕事もその後夜祭関係？」

「そう！そうなんですがな、楠木はん！」

俺は膝を叩いて正解の意を示す。

「あのバカ会長と来ましたら、いきなし『後夜祭をやるう！キャンプファイアーがめっちゃしたい気分！』とかほざきましてな。わては急に木材やらなんやらの調達や会計に大わらわなんですわ。ホンマたいぎい事この上ありませんがな！」

「そ、それは大変……でんがな？」

楠木は困惑しながらも俺の似非関西弁に乗ってくれた。まことに良い子である。

「まあ、そんなわけで非常にめんどくさいこの仕事ではあるが、一つだけ楽しみがあるんだよ」

「どんなこと？」

「仕事の合間に、可愛い女の子とティータイムが楽しめる事」

……あれ、また天使が通ったんだけど。ハードディスクのこすれる音も心なし小さくなってる気がする。

「……なあ、俺なんかマズった？地雷踏んじゃった？楠木はもしかして可愛いって言われるよりカッコいいって言われる方が好きとか？」

「いや、そういう事じゃなくて……うつつ……」

楠木は少し俯きながら口ごもる。うぬぬ、やはり俺はドジったみたいだ。女の子には一つや二つ、三つ四つは触れられたくない何かがあるのだろう。女性はミステリーって隣のおじちゃん（39歳バツイチ）も言ってた。し。

「あ、あのさ。佐々くん」

「どうかしたか？」

楠木は顔を上げ、こちらを向く。

「文化祭の事なんだけど……」

「うん？文化祭が？」

「いつしよに」

ゴガツ。ゴゴゴゴゴ、ゴウン……

かなり大きな音が生徒会室に響いた後、エアコンは再び動きだした。

「おつ。エアコンが直った。楠木、すまないな。音が被って聞こえにくかった。文化祭がどうしたんだ？」

エアコンに注いだ視線を楠木に戻して尋ねなおすと、楠木は少しため息をついた。

「なんでもない。ごめんね、今度また話をするよ」

「急ぎの話じゃないのか？」

「うん。折を見てまた話をするから、その時はよろしくね」

楠木ははにかみながらそう言った。

「ああ、分かったよ。その時はどんな話だろうと話を聞くよ。お菓子の恩もあるし」

「うん。ありがと。じゃあ私はちよつと用があるから行くね」

「そうか。寂しくなるがしょうがないな。それじゃ、またな」

「うん。またね、佐々くん」

楠木が去った後、生徒会室は少し広く感じられた。やっぱり一人は寂しい。ウサギさんは寂しいと死ぬんだぞ！いいのか！

……さて、意味の分からない叫びも挙げたし、仕事を再開するか。

幸いにもエアコンは動き始めたし、先程の楠木とのお茶で心身共にエネルギーは満タンだ。今の俺に怖いものなんてねえ！

「よっしゃバリバリ働きましょーかましょーかマシヨーカ王。明日の楽しみのためなら今日血を吐く所存だぜイエー！」

パソコンに向かい、またもや金額を打ち込みはじめる。つらい仕事だが、明日にはまた楠木とのお茶会があるぜヒーハー！楠木との対話がこの金額地獄の中の唯一無二の楽しみになっている俺は、はりきって仕事を進めていった。

生徒会室から出た後すぐ、私の顔は真っ赤になった。

「うわっ！可愛いつて言われた！佐々くん！佐々くん！可愛いつて言われた！」

窓から顔を出して、火照った顔を冷ます。外の空気と同じくらい熱を帯びているが、風が顔の火照りを持っていつてくれる。

「私とお茶するのが好きって言ってくれたし、段々仲良くなってきたる……よね？うん、仲良くなってる！」

最初は口数の少なかった佐々くんだけ、最近では冗談をとばしてくる程打ち解けてきた。高いお金を出して良いお茶菓子を買ってきたかいたあった。

「……でもやっぱり、好物の甘いもので釣ってる感じがするなあ。なんとというか、卑怯？」

お菓子を貰い物と言ってしまったし、嘘で気を引いてるようで少しナーバスになる。

「いや、だけど恋は戦い、恋愛にはどんな技も悪にはならないってお母さんも言ってたし。セーフ！お菓子作戦はバッチグー！」

私は廊下で一人ガッツポーズをする。はた目から見たらバカ丸出しな姿だけど、まあ人もいないし大丈夫だろう。

「明日の目標は、今日出来なかった文化祭と一緒に回ることを誘うこと！そしてゆくゆくは……」

そこで、私と佐々くんとが二人仲良く歩いている姿を想像してしまい、またもや顔が赤くなる。

「……ッ！頑張ろう！よし、明日はちょっと手作りで頑張ってみよう！」

私は頬を叩き、自分を励ます。明日のお茶会を楽しみにして、私はどんなお菓子を作るのか頭を働かし、帰途へとついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2697t/>

午前10時のティーパーティー

2011年10月8日06時25分発行